

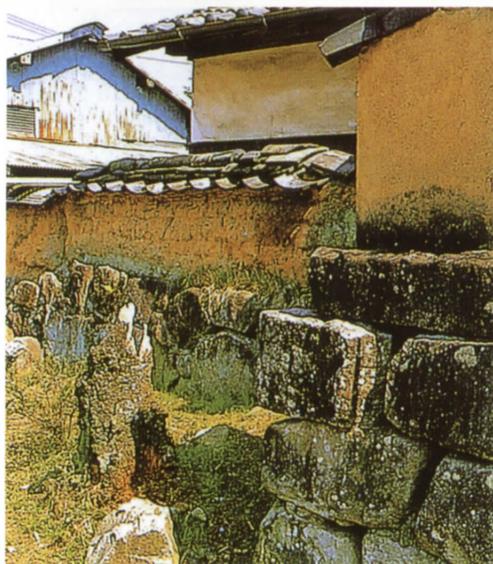
山家宿(3)——構口



◀西構口跡

現在の西構口跡。土壁は明治時代に復元され、昭和30年代にも補修されています。構口が残っているのは木屋瀬と山家だけで、当時の面影を伝えるたいへん貴重な史跡です。

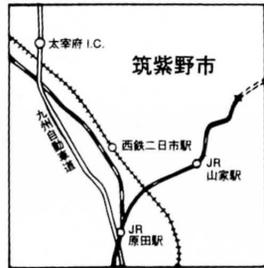
▼西構口横にあった下代屋敷(高嶋家)。明治初年に原田宿から転勤してきた最後の下代です。



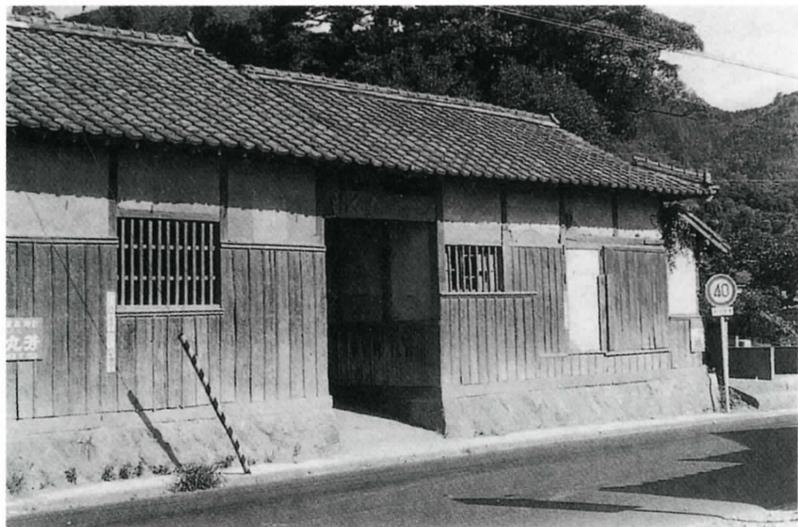
◀西構口跡(川上家側)。石垣と土壁とも残っているのは、県内でもここだけです。また、両脇にも残っているので宿場内の道幅もよくわかります。

「^{かまえぐち}構口」とは、宿場の入り口と出口に設けられた門塀のことです。筑前国内には27の宿場が置かれていましたが、構口のある宿場は、^{ながさきかいどう}長崎街道上の筑前六宿をはじめ、ほとんどの宿場に設けられていたようです。しかし、その六宿の構口も宿場が廃止されたあと、かな

り早い時期に壊されてしまったらしく、残っているのは山家と木屋瀬だけです。特に、山家の西構口は道の両側とも石垣の上に土塀、瓦をふいた昔のままの姿を伝えているのが貴重です。昭和5年に福岡県が土塀の前に標石板を建てています。



◀昭和30年代の西構口付近。昭和天皇の即位記念に植えられた桜並木も今はない。(写真は『筑前山家今昔』より)



▶東構口の横にあった大庄屋近藤家の長屋門(昭和43年8月 近藤典二氏撮影)。老朽化のため平成3年に解体されました。

それには「今構口の遺蹟の残れるもの甚稀なり」と記されており、当時としても珍しかったことがうかがえます。東構口はもう残っていませんが、山家村の大庄屋を務めた近藤家の長屋門横にあったといわれています。

この構口という宿場の特殊な造りは、初めて筑前を旅した吉田松陰の目にも珍しく映ったと見え、「道中ノ諸駅ヲ歴観スルニ、駅

ノ前後ニ於テ左右袖ノ如ク石垣ヲ築キ、女塙ヲ附ル者多シ、亦事アルノ時、里門ヲ作ルガ為ニ便スルカ」と『西遊日記』に書いています。事が起こった場合、門をつけるのに便利なようにしているのだろうかとは、いかにも兵学家らしい観察ですが、実際に門をつけることはなかったようです。